

PUBLICATIONs

出版物紹介

オーシャンファミリー 1973年10月15日

(第三種郵便物認可)

第20号

【2】

懐しの名艇



◇…アインハイツ・^{ウェナー}ゼンナー艇、戦前のヨットマンなら、ご存知だろうが、びわ湖で走っていた「アインハイツ・ゼンナー艇」が、いまもBYC（びわ湖ヨットクラブ・長谷川英一会長）で大切に保存されている。

◇…ベルリン・オリンピックに出場した吉本善多氏が持ち帰ったカーリー博士の10級レーシング艇の図面をもとに浜大津の桑野造船所で建造したもの。進水当時は超最新式・モダンな艇といわれ、全長7尺、幅2尺、オールチークでの骨組みは、まさに手づくりの芸術品。

◇…当時はクルーザーもなく、ヨットといえばA級ディングーだけだったから「E Z」の出現は、まさに驚きと憧れのまど。吉本善多選手はビルマで戦死をし、従兄の吉本哲男さん(44)が代わってオーナー、2人乗りテイラーがU型なものもおもしろい。

「いまも走りますが、あれだけの名艇ですから年に2、3隻、BYCの記念レースに出場するだけです」51年の年輪を感じさせるBYCの「宝」である。

^{ウェナー}

アインハイツ・ゼンナー艇

The KAZI Who's Who

この人

60周年を迎えた琵琶湖ヨットクラブ会長

長谷川英一

Eiichi Hasegawa-Commodore of Biwako Yacht Club

そのヨット歴は、BYCの歴史とびつたり一致する。「ヨットとともに60年」と自負する所以である。

1922年日本ヨット倶楽部(BYCの前身)を創立した当時、琵琶湖にはいわゆるゲタブネしかなかった。そこで丸善を通して入手した資料を元に「ユングフラウ」(ノーフォーク型キール・ポート)を建造、さっそく琵琶湖周航に。「そのころはレースなんて考えなかった。たくさん的人数でクルージングするためにピッタリ」だと思った「ユングフラウ」も、しかしながら走りは今一つ。そのうえ台風にも遭遇したりで、さんざんな周航となった。

その後、一時活動が停滞したが、日本ヨット協会創立(昭和7年)のころ国内5m級、A級ティンギーを次々と進水させ、ルール・ブックを初めて邦訳し、活動再開の基礎をかためた。また、同志社大学、京都大学、阪大ヨット部等の育成にも直接、間接に携わったり、帆走学校を開設したりと、当時のヨット・クラブとしてはきめの細かな普及活動をつづけた。

「京都、近江の人間は進取の気性にとんでいる」と自負する。その表れがA級ティンギーの普及。



「オリンピックに出るために」と国際クラス艇の採用を逸早く提唱、それが「インカレで長い間使われるようになった」ことが誇りでもある。

また、「外国ではクラブ主催の大きなレースがあるのに日本には……」と、10年前から始めた琵琶湖カインド・レガッタでは、ヤードスティック・ナンバー、ゲート・スタート、コンピューターによる成績表作製などという新しい方法をつぎつぎと採用した。

自分自身でも、年に一度は必ずティンギーに乗る。とても80歳とは思えない活躍ぶりだが、健康の秘訣は「歩くこと」。学生時代、京都市内からポート部艇庫まで毎週徒歩で通ったのが教訓になっている。

さて、これからの琵琶湖はどうなるか――

「琵琶湖総合開発の影響で、水位が2mほど下がる。クルーザーに関しては湖北が(クルージング・ポイントとしては)良くなるだろう」、また「喫水の浅い船が必要になる。土地土地に適したヨットを考えねば、和船のように」と若干、憂え気味。

大先輩として若い人たちにアドバイスを――とお願いしたら、

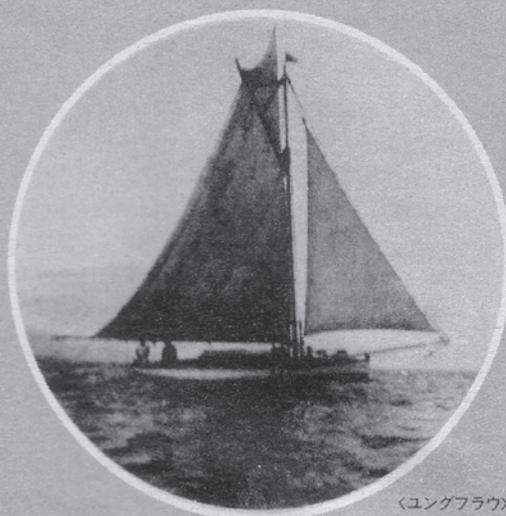
「もっと天候に注意せよ。それに装備をしっかりと」と、現場の警句に終始した。お年寄りにありがちな抽象論はまったくなし。

歯切れのよい、しかも穏やかな80歳の現役ヨットマンである。

2人の息子さん、そしてお孫さんの2人もヨットに乗り、親子三代のセーリング風景も珍しくない。

なお、今年の琵琶湖カインド・レガッタは7月25日、ボードセーリングも大歓迎とのこと。

BYCの記録から見る 琵琶湖 60年の歩み



〈ユングフラウ〉

●写真及び資料提供／琵琶湖ヨット・クラブ

BYCこと琵琶湖ヨット・クラブが、その前身である日本ヨット倶楽部から数えて今年で創立60周年を迎える。奇しくもヨット協会創立50周年、「舵」誌創刊50周年と重なり、その歴史の深さを改めて感じさせる。そこでBYCの年譜を繰るとともに、当時の貴重な写真をフィーチャーして、琵琶湖60年の動きをながめてみよう。
(編集部)

ノーフォーク型キール・ヨット (3.5t, 380f²) を、大津の桑野造船所で建造し〈ユングフラウ〉と命名する。翌年、同艇に6人が乗り組み、3泊4日の琵琶湖周航を行なう。しかし、その年の8月、浜大津港に係留中、台風のために大破。(「ユングフラウ号修理なりたるも、その後クラブ員氣勢揚らず艇は尾花川地先に陸揚げしたまま雨淋霜打数年自然に朽ちて再び使用に耐えずなりぬ」との記録がある)

その後、メンバーが少ないこともあってしばらく活動が低迷

1922年(大正11年)

日本ヨット倶楽部創立

京都市立第一商業学校(現在の西京商業)ボート部OB有志が集い組織した。メンバーは宮崎晋一、上田健治郎、吉本正雄、安田常保、中塚善助、安田貞一郎、長谷川英一の各氏。この年、スカル3艇、キャットリグ艇1隻を横浜の岡本造船所で建造している。

1924年(大正13年)

〈ユングフラウ〉建造

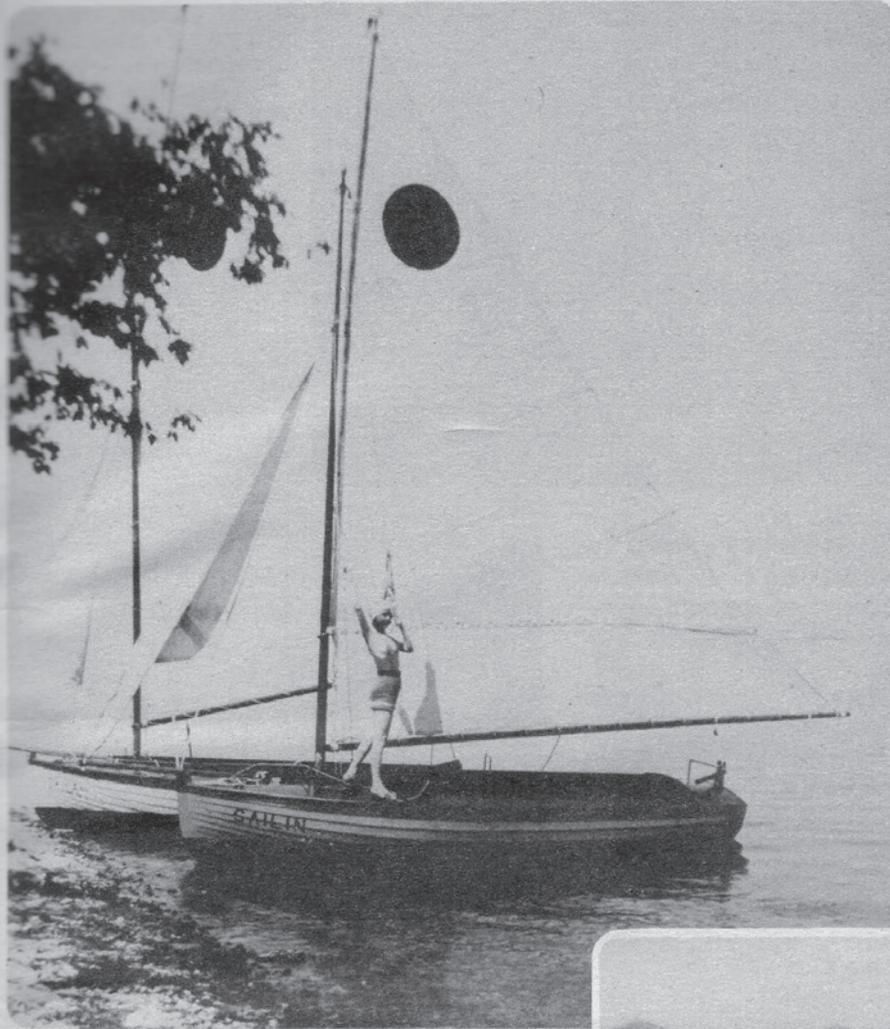
丸善でヨットに関する本(たぶんカリー博士の帆走理論と戦術集)を取り寄せる際に、同時に入手した図面から、イギリス・



↑日本ヨットクラブ尾花川艇庫

↓5m級のレース風景





⇨琵琶湖に浮いた国内5m級。艇上でポーズをつけている女性は、日活女優の夏川静江さん。日活女優一行が昭和8年に日本ヨット倶楽部を訪問した記念でもある。写真下はその一行、観光船の上で遠めがねを……

するが、1930年（昭和5年）、有志を集い復興を議し、1931年（昭和6年）

大津の井口造船所で、国内5m級2艇〈晴嵐（SAILAN）〉、〈晴朗（SAILO）〉を建造。また、日本ヨット倶楽部尾花川艇庫を建設し、この2艇を格納する

この年、大國寿吉大阪商科大学教授が会長に就任。

また、YRA常任事務局長ヘックストール・スミス氏に依頼してルール・ブックを入手し、吉本正雄、鈴木英の両氏により邦訳する。

1932年（昭和7年）

国内5m級〈晴玲（SAILEI）〉、〈晴淋（SAILIN）〉の2艇を大津の桑野造船所で建造する。この頃より、神戸の外人ヨットクラブKRACとの交流が深まり、帆走指導を受ける。また、KRACのメンバー テリー氏が日本ヨット倶楽部の客員となり、瀬戸内海に浮いていたナックル型艇を琵琶湖へ回送した。この艇は、テリーボートと称して、今も艇庫に健在である。

次に、英国RYAより国際12ft級の設計図を入手し、10艇を大津・桑野造船所にて建造する。

またこの年は、日本ヨット協会設立に伴い、クラブ名称を琵琶湖ヨットクラブ（BYC）と改称する。と同時に、11月に西部日本ヨット協会を設立し、大阪毎日新聞本社にて創立総会を開催する。

1933年（昭和8年）

A級12ft艇を10隻建造する。九州帝国大学ヨット部よりの依





⇐大阪毎日新聞本社で開かれた西部日本ヨット協会創立総会。この時の構成メンバーは、日本ヨット倶楽部(琵琶湖)、九大玄界ヨットクラブ(博多湾)、東海ローイングクラブ(伊勢湾)、クレセントヨットクラブ(大阪湾)及び大毎ヨットクラブ、大商大ヨットクラブである

↓10隻の12ft艇のうちの1隻<やくも>

頼で2艇を分譲する。この年に、同志社大学ヨット部がBYC内に創立し、BYC艇を使用し練習を始める。また、西部日本ヨット協会が主催し、BYCの協力の下、西部日本ヨット選手権大会が開催される。

1934年(昭和9年)

室戸台風により艇庫全壊。陸置きしていた国内5m級が、100m先の国道にまで飛んでいったという。

10月20, 21日に、第2回全日本A級12ft艇選手権大会開催。主催日本ヨット協会、後援・大阪毎日新聞。コースは柳ヶ崎沖。

1935年(昭和10年)

艇庫再建設工式。琵琶湖帆走学校開設。京大ヨット部BYC内で創立、BYC艇を使用し帆走指導を受ける。同ヨット部は9月にA級ディンギーを3隻建造している。この年の第8回明治神宮大会(11月3日、横浜ヨットハーバー)に、BYCから参加、とこの年は、多くの行事があった。

1936年(昭和11年)

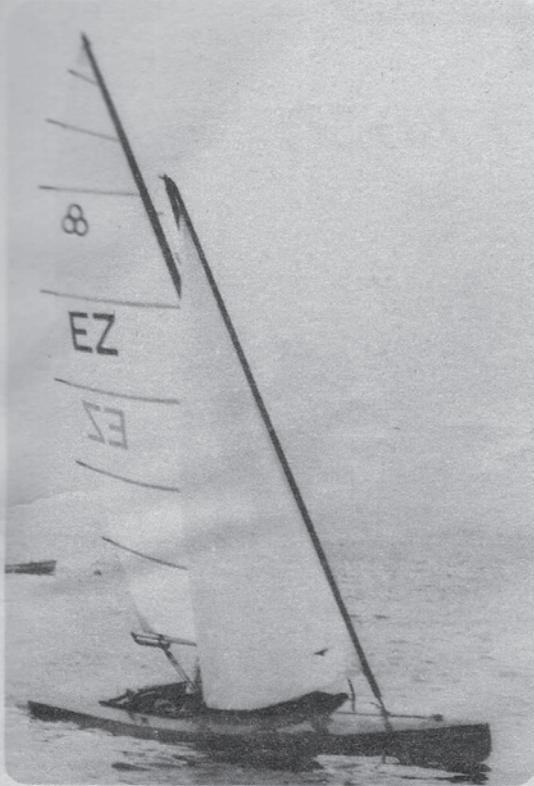
BYCの吉本善多選手がベルリン・オリンピックへ出場。また、鈴木英氏がドイツより取りよせた図面をもとにE. Z. (EINHEITS ZEHNER) 級を桑野造船所で建造。E. Z. 艇はBYCのシンボルともいわれる姿を現在に保ち、琵琶湖カインド・レガッタではパス・ファインダーとしてその勇姿を毎年見せてくれる。



↑艇庫前で野球をするメンバー



⇐第2回全日本A級12ft艇選手権大会



↑E.Z.級

1937年(昭和12年)

BYC鈴木英著「帆走叢書III艇型論」発行。

6月13日、BYC後援の下、同大、阪大、京大の3大学対抗定期戦開催。

11月、第9回明治神宮大会出場。

1939年(昭和14年)

同大ヨット部及び京大ヨット部がBYCから独立する

1946年(昭和21年)

BYC保有艇進駐軍接收——国内5m級及びA級ディンギー12艇が接收された。代償20000円。

8月2日、島津ヨット部創立。

1948年(昭和23年)

テリーボートと同型艇を3隻、柿坂工作所にて建造。

1949年(昭和24年)

供出していた国内5m級2隻、A級ディンギー4隻を買い戻し、A級は2隻を立命大ヨット部に、1隻を大津高ヨット部に譲渡した。

1950年(昭和25年)

ジェーン台風により、艇と艇庫が吹っ飛んだ。

1951年(昭和26年)

前年壊れた艇庫の再建完成。この年BYC20周年に当る。全日本インター・クラブ・レース(柳ヶ崎)で、青木弘・吉本哲男組優勝。

1953年(昭和28年)

児玉、森岡両氏の2隻のシーホースが琵琶湖に進水。

この年、台風13号により艇庫破損。

1955年(昭和30年)安田貞一郎氏会長就任。

1962年(昭和37年)

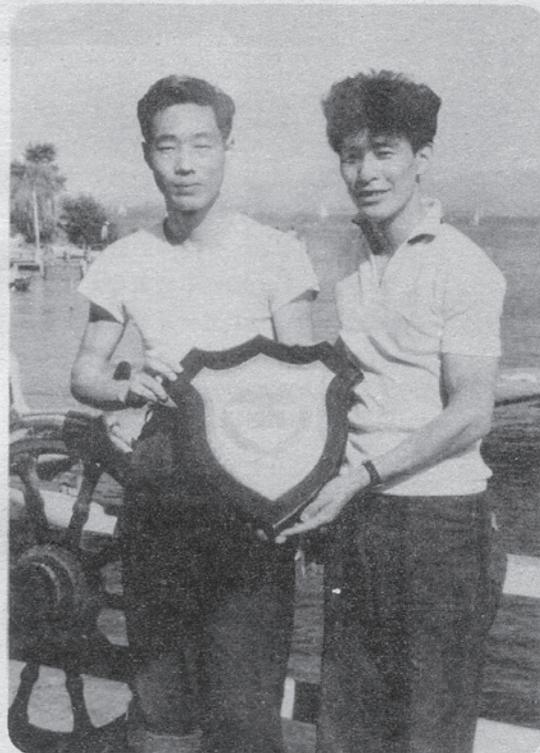
滋賀県ヨットハーバー完成。

1968年(昭和43年)

長谷川英一氏会長就任。

この後もアクティブな活動をつづけ、1972年(昭和47年)にBYC50周年を迎える。そして次の10年を過ごすわけだが、この10年の間、BYCとして特筆すべきことは、琵琶湖カインド・レガッタの毎年開催があげられる。このレガッタのおかげで琵琶湖ナンバーが整備されてきたし、ゲート・スタートの積極的な利用、コンピューターの導入などで、多数艇参加のレース運営におけるノウハウを築きつつあるのだ。

その琵琶湖カインド・レガッタも今年で第10回を迎え7月25日に開催の予定である。



↑全日本インタークラブ・レース優勝の青木弘(左)、吉本哲男の両氏

↓50周年記念式典で



京都新聞 1994年12月4日 京都新聞五大賞受賞

京都府ヨット
連盟会長



秋山 福夫さん

ヨットにかかわってすでに半世紀。五輪やアジア大会の強化委員長や監督を務めるなど日本のヨット界をリードするとともに、国際審判員として日本ヨ

日本代表の監督も

ットの国際化に貢献。ジュニアヨットクラブを創設、後進の育成にも情熱を注いできた。

ヨットは、知識だけでは勝てない。タフな精神力、状況を察知する感覚、自己を律する厳しさ…。「ヨットを通して、人格的にも世界に通用する人間を育てたい」と意欲を燃やす。家業や大会の手伝いに忙しいが、「肩書が外れたら、もう一度子どもたちを教えたい」と柔和な笑顔を見せた。

あきやま・とみお 1929年、高知県生まれ、同志社大卒。日本ヨット協会オリンピック強化委員長やアジア大会監督などを歴任。94年から現職。日本ヨット協会功労賞、府体協スポーツ功労賞を受賞。京都市山科区川田御出町。

京都新聞 1999年10月11日

第3種郵便物認可

一斉にスタートを切り、先頭を競い合うヨット
(大津市のなぎさ公園沖の琵琶湖)



ヨット70艇 湖上を快走

SAIL
おおつ

間近でレース 見物人楽しむ

ヨットレースの「第二回 SAILおおつ」(京都新聞社主催、琵琶湖ヨット倶楽部主管)が十日、大津市

のなぎさ公園沖の琵琶湖で行われ、愛知県から参加した水谷謙太さん(心・山根伸宏さん)とのペアが総合優勝した。湖岸に近いコースで繰り広げられるレースとあって、同公園には多くの市民が詰めかけ、湖上のヨットマンに声援を送った。

同大会は、大津市制百周年を記念して昨年スタート。今回のレースには、七十艇がエントリーした。470級やスナイプ級などの各ヨットが同時スタートし、艇種ごとにハンディをつけた総合成績で順位を競い合った。ほかに、中学生以下のOP級レースに七艇

が参加した。午前十一時、なぎさ公園沖にヨットが集合。スタートの合図に合わせて、ゆっくりとスタート。選手たちは約七時のコースを約一時間かけてゴールした。釣りに来てレースを見物していた会社員、横山和夫さん(五〇〇)宇治市は、「ゆっくりに進んでいくヨットを見てみると、気分もよった

り。間近に見ることができて楽しい」と話していた。同ヨット倶楽部の秋山福夫会長(七〇)は、「見物する人にも楽しんでもらえるよう、湖岸近くにコースを設定した。今年もたくさん参加者があってよかった」と目を細めていた。二位以下の入賞者は、次のみなさん。

- ▽一般 ②出中(シーホッパー、京都市) ③林(レザイ、京都市) ④勝島(シ
- ①ホッパー、草津市) ⑤木内(モス、大津市) ⑥片木
- (シーホッパー、大津市)
- ▽OP級 ①西村秀樹(京都市) ②加藤(愛知県碧南市) ③蔓(京都市)

京都新聞 2001年10月22日

巧みに風を利用し、マークを回る参加者ら (大津市なぎさ公園沖の琵琶湖)



湖風受け、白い帆滑走

SAILおおつ 曇天つき51艇熱戦

湖岸から見える範囲で展開されるヨットレース「第四回SAILおおつ」(京都新聞社主催、琵琶湖ヨット倶楽部主管)が二十一日、大津市なぎさ公園沖の琵琶湖で繰り広げられた。どんよりとした曇り空の下、参加した五十一艇の真っ白なセールが水面を走った。大津市制百周年を記念して始まったレースで、コースは湖岸から最短路五十済のところ。例年な

ら、なぎさ公園にはアマチュアカメラマンの列ができるが、あいにくの天気となった今年はまだ。それでも、沖には安定した北東の風が吹き、参加者には気持ちよいレース日和となった。成績は次の通り(敬称略)。

【一般】①船越肇(京都

市左京区)・村田耕一(草津市) ②小谷憲三(滋賀県

竜王町)・大井上哲郎(三重県上野市) ③田中識章(京都市北区)
【オブティミスト】||中学生以下|| ①青木拓(京都市伏見区) ②田中裕之(滋賀県水口町) ③脇宗睦(大

日経新聞 1999年 11月 14日

ひと ネットワーク

青木英明さんら 琵琶湖ヨット倶楽部

「遊び好きの、いい大人たちが集まる道楽クラブ」。三洋電機メカトロニクス研究所の青木英明さんは、自らがキャプテン（事務局長）を務める「琵琶湖ヨット倶楽部（BYC）」をこう評する。だが実は名門ヨットクラブである。



輝かしい歴史誇る 遊び好きの集まり

一九三三年、京都一商（現在の西京商業）漕艇（そうてい）部の有志が結成した日本人による最初のヨットクラブだ。設立当時は「日本ヨット倶楽部」と名乗っていたほどで、その歴史はヨット競技の

「遊ぶ好きの、いい大人たちが集まる道楽クラブ」。三洋電機メカトロニクス研究所の青木英明さんは、自らがキャプテン（事務局長）を務める「琵琶湖ヨット倶楽部（BYC）」をこう評する。だが実は名門ヨットクラブである。

一九三三年、京都一商（現在の西京商業）漕艇（そうてい）部の有志が結成した日本人による最初のヨットクラブだ。設立当時は「日本ヨット倶楽部」と名乗っていたほどで、その歴史はヨット競技の

前は県議会議員や大学教授、呉服問屋、造り酒屋の経営者ら地元の有力者や知識人層が多かった。

んは「実はメンバーの普段の仕事についてはよく知らない」と笑う。「ヨット好き」という共通項だけがメンバーの絆（きずな）となっている。活動は週末が中心。BYCのメンバーは「ディンギー」と呼ばれる小型ヨットのレー



競技活動後の集いも楽しみの一つ (前列右から2人目が青木さん)

「競技人口が減っているヨットの人気が回復、そして天津市のアップルにつながるれば、こんな期待を胸に、青木さんは日々仲間たちと汗を流している。

琵琶湖ヨット倶楽部（BYC）の今年で二十回目を迎えた。もう一つが昨年から始まった「SAILおまつり」。どんな

ヨットも参加できるオープンレースの目的は、勝ち負けではなく、ヨットの楽しさを伝えること。参加者だけでなく観戦者も楽しめるように、通常より湖岸近くにコースを設定する。BYCは大会運営を一手に引き受けている。

読売新聞夕刊 2011年 5月 14日

2011年(平成23年)5月14日(土曜日)

三洋電機
EBソリューション事業推進部長
青木 英明さん 52

OFF私の休日



沖に出て風を受けると仕事の悩みも忘れられるという (大津市の琵琶湖で)

1977年に日本人が作った国内最古のヨットクラブ「琵琶湖ヨット倶楽部」(大津市)で、週末ごとにヨットを走らせている。

中学3年生のころ、クラブに所属していた伯父に誘われヨットを始めた。見よう見まねで湖に出るうち、競技ヨットに魅了された。大学に入るとすぐにクラブの正会員になり、一人乗りでセイルが一枚のレーサー級選手になった。大学院に進学した後、全日本選手権や東アジア大会への出場経験もあ

自然派 ヨットも事業も

競技では、その場の風の強さだけでなく、波や雲の様子、周囲の山々の見え方も勘案し、セイルと方ジを微妙に操る必要がある。ただ速く走れば勝てる競技ではなく、相手の風上に立って、乱れた風を送るなど、戦術を駆使する。あらゆる要素を総合的に判断して一つ一つの動きを決断するという点で、「ヨットと事業は似ている」と話す。会



社では、主力のリチウムイオン電池を使った電動バイクの駆動システムを開発しており、「環境に優しい点でヨットと電池は共通点がある。これからも公私とも自然派でいたい」と考えている。

今でも月に1度、競技会に参加し、20〜80代の約40人の会員がいるクラブの副会長の仕事もこなす。2010年夏、オーストリアで開催された国際ヨットレースに日本のヨットクラブで唯一招待された。クラブの伝統を守りながら、今後もヨットの普及を図ってきたいという。(立石知義)

オーストリア国際クラシックセーリングウィーク参戦記

レポート＝青木 英明 (西宮船艇倶楽部) 写真＝L. Nagl
 report@yokohama.kaiyukai.jp nagl@yokohama.kaiyukai.jp



左：400kgのハンダークラスセが競う姿は、まさに壮観
 右：木造マスト＆カブリジ仕様のオールドスタイルを守っているボートが多い
 下：ピアノのような光沢の仕上げが美しい参加艇

オーストリア
 ウィーン
 オーストリア



1950年以前のクラシックヨットが、
 オーストリアの湖で美しさを競う



約60年を越える木造ヨットが42隻集まった (photo by K. Ishida/A. G.)



今回我々が体験した、ベルリンオリンピックに採用されたオランダ製ヨット

約60年以上のピカピカに磨かれた木造ヨットが、アルプス山麓の美しい湖でレースを繰り広げる。一瞬タイムマシンで過去にさかのぼったかのような、そんな夢のような光景が目の前に広がります。しかもそのレースに自分たちが出場するという、本当に素晴らしい体験をしてきました。そんなオーストリアの伝統的で美しいセーリングシーンをレポートします。

今回訪れたのは、オーストリア共和国、ザルツブルグ近郊のウォルフガング湖。アルプス山麓に北河湖が点在する、風景明媚な避暑地でもあります。この湖畔にあるユニオンヨットクラブ・ウォルフガング (Union Yacht Club Wolfgangsee) をベースに、7月22～25日の日程でレースは開催されました。このヨットクラブは、規模はそう大きなもののオーストリアの主要なヨットレースの拠点で、過去何人ものオリンピックメダリストを輩出しています。またOP級のジュニア育成も行われています。

湖で発展した木造セイルボートが集結

今回のレースはLGT Sailing Cup (Internationale Terreichische Traditions Segelwoche 2001:オーストリア国際クラシックセーリングウィーク)という名称で、1950年以前に建造された船のみ参加可能。中継では最大のクラシックヨットレースで、K.U.K.船協 (王国セーリング協会)という旧王室ハプスブルグ系に関係する組織が主催して毎年この地区で開催されています。

参加船種は、湖岸者の波の立たない地域で発達した船が中心で、日本で見られる船種としてはドラゴン級が参加していますが、ほかはなじみのないクラスばかりです。最大級はワンダークラスと呼ばれる



左:もう1隻のチャーター艇は Berjolek (Einheitschner)



右:日本から参加した琵琶湖ヨット倶楽部のメンバー。左から、青木、松田、み、長谷川(会務)

る40ftのキールボートで、帆走する姿は絶景の一言です。レースは、船種に応じてヤードスティックナンバーが付けられ、タイムハンディキャップで続きます。

すべてのボートは当然木造で、アルミマストでのレースは認められているものの大半は木製マスト、昔ながらのガブリも多くあります。ピカピカにニス塗りされた装飾品とも言える素晴らしい船ばかりで、そんな宝物のような船が42隻も集まってレースを繰り広げるといって、日本では考えられない格別の光景が演出されました。

きっかけは、琵琶湖ヨット倶楽部のEZ級

今回の参加のきっかけは、我々琵琶湖ヨット倶楽部で所有する1939年建造のEZ級 (Einheitszehner) という木造シングルキールボートです。元々は純粋、ベルリンオリンピックに出場した故吉本善太氏が、この地域のレーシングラインギーに魅せられ、入



オープンングセレモニー。このイベントは、日本がハプスブルグ系に開港権が主権している

手した回 面でも建造したもので、帆走可能な状態で整備するとともに、クラブのシンボル旗となっています。このEZ級は純粋ドイツオーストリアで普及したセイル面積10m²のレーシングラインギーが発展、ワンデサイン化したクラスです。現地ではその歴史と残存する船の秘蔵愛護が認められており、それを取り組むアトマ・ウラサティ氏が我々のホームページに掲載された写真を見つけ、日本に同型船が存在することを知り、その経緯を尋ねてきたことから交流が始まったもので、彼から、「同型船を手配するのでクラシックレースで一戦いコースをしませんか」との誘いを受け、琵琶湖ヨット倶楽部の長谷川会長以下4人で参加することになったのです。

今回は、そのEZ級とともに、ベルリンオリンピックでシングルハンド船として採用された、オリンピック級も併り受け、2艇でのレース参加となりました。結果は27位と38位と振るいませんでしたが、前述した経緯もあり、同じ船を保有する日本の歴史あるヨットクラブとして紹介されるとともに大歓迎を受け、4日間、ヨーロッパの伝統的なセーリングシーンとヨットクラブライフを堪能し、交流を深めることが出来ました。

洋のない中継でも、このような伝統的なヨットライフが受けつがれていること、この地域の美しさに驚き、改めてその魅力に引き込まれた次第です。

舵誌 2014年2月号

BACK TO 1939

文=市川和彦 写真=中村剛司(本誌) 写真提供=琵琶湖ヨット倶楽部
 text by Kazuhiko Ichikawa photos by Tsuyoshi Nakamura (Kazi) photos by Biwako Yacht Club
 参考文献=「琵琶湖ヨット倶楽部 創立90周年記念誌」、
 「日本ヨット史」(白崎謙太郎 著/発行:舵社)

幻のディンギー、EZ級が琵琶湖に浮かんだ そのときへBACK! (前編)

日本ヨット界がオリンピックにデビューした1936年のベルリン大会で、日本代表の一人に選ばれた琵琶湖ヨット倶楽部の吉本善多(愛称「ぜんた」)選手。このとき彼は、ドイツ国内を視察して歩き、1940年の東京オリンピック種目に内定していた、EZ級というディンギーに出合って惚れ込んだ。そこで、琵琶湖ヨット倶楽部がドイツから図面を取り寄せて、1939年に1艇を建造。残念ながら1940年の東京オリンピックは幻と化したが、この図面と艇は70年の時を経て、日本と彼地を結ぶ奇跡的な縁を生み出した。そのあましを2回の連載で紹介したい。



琵琶湖ヨット倶楽部の吉本善多選手が1936年のベルリン・オリンピックに参加した際、ドイツ国内を視察して歩いてひと目惚れした、EZ級ディンギー。1940年に開催される予定だった東京オリンピックの競技種目に内定したこともあり、琵琶湖ヨット倶楽部の会員、鈴木英氏がドイツから図面を取り寄せ、地元の桑野造船所が1939年に建造した

1939年の出来事

- 1月15日 横綱双葉山が、安藝ノ海に敗れる。連勝記録69勝。
- 2月14日 日本政府が、日本国民に対し「金製品改修・強制買い上げ」を実施。
- 3月16日 ドイツがボヘミア・モラビアの保護領化を宣言(チェコスロバキア併合)、ハンガリーがカルパト・ウクライナ共和国を併合。
- 4月12日 米穀配給統制令公布。
- 5月13日 NHKが無線によるテレビ実験放送を公開。
- 6月10日 南京総領事館毒酒事件。
- 9月1日 ナチス・ドイツ軍とスロバキア軍によるポーランド侵攻、第二次世界大戦勃発。
- 11月16日 アル・カボネがアルカトラス刑務所から釈放された。

音楽：ディック・ミネ「上海ブルース」、田端義夫「大利根月夜」、東海林太郎「名月赤城山」
 映画：「風と共に去りぬ」、「駅馬車」

琵琶湖に日本ヨット倶楽部あり

以前、本連載(2012年3月号)でも紹介したように、わが国に生まれた初めてのヨットクラブは、1886年(明治19年)に創設された横浜セーリングクラブ(後に、横浜ヨットクラブ→横浜ヨット協会に改名)であろうといわれている。ただし、同クラブは居留外国人のクラブとして結成されたため、長らく日本人メンバーが正式に加わることはなかった。

日本人の手によって興されたヨット発祥の地については、諸説あって定かではないが、今回の話を生んだ琵琶湖ヨット倶楽部はその最有力候補と言って間違いはない。1922年(大正11年)に産声を上げた同ク

ラブの前身、日本ヨット倶楽部は、京都市立第一商業学校漕艇部の有志が集い組織したもので、当時、国名を付けたヨットクラブはほかになかったことがうかがえる。

日本ヨット倶楽部の創設メンバーは、京一商漕艇部OBの7人といわれており、彼らは漕艇を続けながらヨットにも関心を抱いていった。そのメンバーの一人、長谷川英一氏の子息である長谷川和之氏(1930年生まれ)が琵琶湖ヨット倶楽部の現会長なので、氏の幼いころの思い出や父親などから聞いた話で、多少は当時の様子を知ることができる。

「江戸から明治に時代が変わって東京に都が移されたことで、これからの京都は寂



1940年の東京オリンピックに夢を馳せた吉本善多選手だったが、同大会は第二次大戦の勃発で中止となり、その後、吉本選手も硫黄島の戦いで帰らぬ人となった。ヨット選手として活躍した経緯は、鎗国神社に奉納された碑に刻まれている



30ftのセーリングクルーザー〈ユングフラウ〉を写した貴重な写真。1925年に実施された3泊4日の琵琶湖周航は、日本人だけの手によって初めて敢行されたヨットクルージングであるといわれている

れてしまうのではないかと、当時、多くの京都人が危機意識を抱いたそうです。そのため、新しい事業を興して栄えていかねばならないと考え、進取の気風が生まれていきました」と語る長谷川氏。

京都の人たちは琵琶湖から疏水（水路）を引いて、1891年（明治24年）に日本初の商業用水力発電所を建設。その電気で日本初の市電を走らせており、戦後においては村田製作所や京セラといったベンチャー企業の雄を生んでいる。ヨット文化もまた、時代を先取りする発想のなかで育っていったと言えるだろう。

「京都を支えていた財界人は英国発祥のラグビーや漕艇に深い関心を抱き、こうした新しい気風を役人も理解していたようです。ですから、疏水ができると、その水門の近くの敷地に府が公費で漕艇用の艇庫を建設し、京都市立第一商業学校をはじめとする各学校の漕艇部が軒を連ねて活動を始めていきました」

そこに通って練習に励んだ長谷川英一

氏は、東京の大学に進学してからも漕艇を続けたが、琵琶湖が恋しくなり、地元に戻って京一商漕艇部の立ち上げに参画したという。

「当時、京都市立第一商業学校では英語に力を入れており、父の卒業アルバムも全ページが英語で書かれていました。そのような背景もあり、父をはじめとするクラブの創設メンバーの面々は、漕艇を楽しむ傍ら外国人が集うY.Y.C.（横浜ヨットクラブ）やK.R.A.C.（神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ／神戸外国人ヨットクラブ）などからヨットの情報を得ていたそうです」

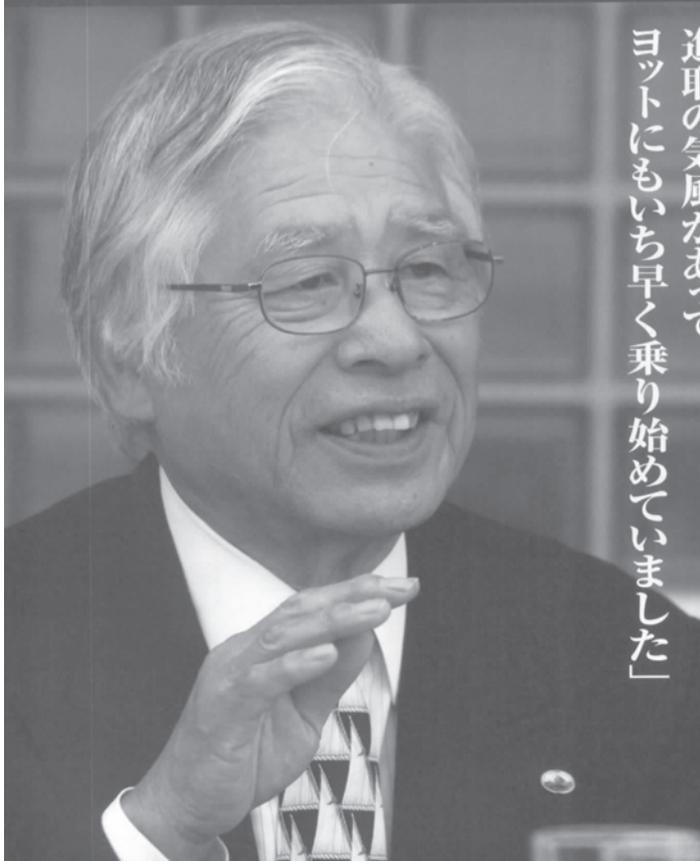
日本ヨット倶楽部を立ち上げた7人は、こうした情報を基にディンギーでヨットの操船を覚え、1924年（大正13年）には30ftのセーリングクルーザー〈ユングフラウ〉を地元の桑野造船所で建造。翌年7月には、米や肉、野菜を艇内に詰め込み、3泊4日ばかりで琵琶湖周航を果たした（湖の航行なので、水だけは積む必要がなかったそうである）。

協会に譲ったクラブフラッグ

残念ながら、〈ユングフラウ〉は琵琶湖周航の直後に台風で大破してしまい、この影響を受けてクラブの活動も一時は冬眠



琵琶湖ヨット倶楽部の創設メンバーの一人、長谷川英一氏と、その子息で現クラブ会長の和之氏。古き良き思い出を記した一葉だ

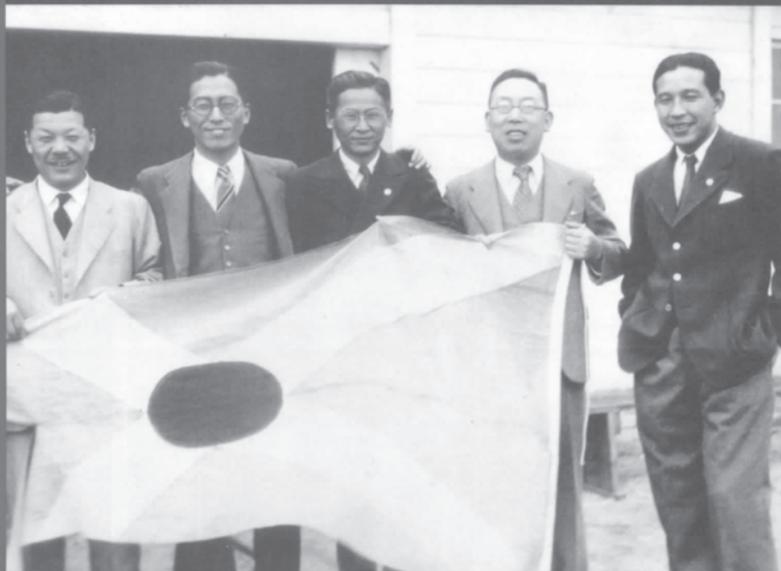


「京都には明治の時代から進取の気風があつて、ヨットにもいち早く乗り始めていました」

長谷川和之（はせがわ・かずゆき）

1930年生まれ。京都府出身。琵琶湖ヨット倶楽部の前身、京一商漕艇部の創設メンバーの一人、長谷川英一氏の子息として戦前のクラブライフを経験。自身も、戦中から現在に至るまで漕艇やヨットに乗り続け、1998年には、日本最古のディンギーといわれているクラブ艇、テリーボートのレスタアを敢行。長年にわたってクラブ会長も務め続けている。

BACK
TO 1939



1932年に日本ヨット協会ができたことを受けて、日本ヨット倶楽部はそれまで使っていた日の丸を使ったクラブフラッグを協会に譲渡し、琵琶湖ヨット倶楽部に改名。写真で留め持つ、白地の斜め十字の中央に日の丸を置いた新しいクラブフラッグを採用した

状態に陥ってしまったが、1930年(昭和5年)になって有志が集まってクラブを再建。活動の中心を漕艇から帆走に移して、活動を継続した。

漕艇部の時代同様、メンバーたちはデインギで活発な活動を展開。英国から取り寄せたルールブックを翻訳して琵琶湖にヨットレースを定着させていき、1932年(昭和7年)に「日本ヨット協会」が発足すると、クラブ名やクラブフラッグのデザインを協会に譲り、自らは「琵琶湖ヨット倶楽部」に改名した。

現在は日本セーリング連盟となってフラッグのデザインも一新されたが、日本ヨット協会時代のクラブ旗(協会旗)を覚えている人も少なくないはずである。あの、赤い十字の左上に日の丸が描かれたフラッグは、琵琶湖で生まれたものだったのである。

また、フラッグを譲った琵琶湖ヨット倶楽部は、白い斜め十字の中央に日の丸を置いた紺地のフラッグを新たに採用。それまで続けてきた活動の手を緩めることなく、同志社大学や京都帝国大学のヨット部設立に力を貸し、同時期にできた九州帝国大学ヨット部とも交流を重ねながら、西日本を中心にヨット競技の普及に努めていった。

ちなみに、本誌が創刊されたのも、日本

ヨット協会が設立された同年の1932年のことだった。そのため、琵琶湖ヨット倶楽部の活動も本誌に記されており、当時の様子をまとめた後年の記事をひもとくと、クラブ名を新たにした1932年にKR.A.C.(神戸外国人ヨットクラブ)のE.B.テリー氏がクラブの客員メンバーとなってセーリングの指導にあたり、これに伴い、氏が愛用していたデインギが神戸から琵琶湖に回送されたとする。



日本ヨット倶楽部が創設された1922年当時に、クラブ艇でセーリングを楽しむメンバー、安盛善助氏。静かな湖面をシングルハンドで走る気分はどのようなものだったのだろうか

この艇は、やがてテリーボートという愛称で親しまれるようになり、戦後になってもクラブ艇として稼働。一時は倉庫で眠った時期もあったが、現在の長谷川会長が1998年にレストアを実施して現役に復帰した。いまでも乗れる状態で保管されており、日本最古の現役デインギであるとされている。

また、この1932年に同クラブは英国のR.Y.A.(ロイヤルヨット協会)からA級デインギ(国際12ft級)の図面を取り寄せ、桑野造船所に10艇の建造を発注。翌1933年に納艇されると、そのうち2艇を九州帝大ヨット部に譲渡。残りの艇は、琵琶湖ヨット倶楽部内に創設された同志社大学ヨット部などが借りて練習に励んだという。

ちなみに、1933年には8月に琵琶湖ヨット倶楽部が運営協力をして第1回西部日本ヨット選手権大会が開催されており、同年10月に東京の品川沖で開催された第1回全日本ヨット選手権大会では、後に



左:1933年には、琵琶湖ヨット倶楽部が大湖汽船(現 琵琶湖汽船)の宣伝に協力し、日活女優を迎えてヨットを使った広告写真を数多く撮影した。当時のファッションを知る貴重な資料にもなっている
右:汽船のデッキから沖のヨットを眺める日活の女優さんたち。今となっては、レトロな雰囲気も新鮮に感じられる





1933年8月には、琵琶湖ヨット倶楽部の協力の下で第1回西部日本ヨット選手権大会が開催され、A級ディンギーなどが多数参加して熱戦を展開。続く10月には、同クラブのエース、吉本善多選手が東京湾の品川沖で開かれた第1回全日本ヨット選手権大会に出場し、A級ディンギーの初代ナショナルチャンピオンに輝いた



1934年の室戸台風によって従来のクラブハウスが崩壊したため、翌年に建て替えられた新たなクラブハウスと艇庫。当時のメンバーたちは、この水際のテラスで楽しいひとときを過ごしたに違いない



今回の記事を作るにあたって、資料の提供に協力していただいた現 琵琶湖ヨット倶楽部の広報担当、青木英明氏。戦前から戦後、現在に至る膨大な資料や写真を丁寧に保存し続けている

EZ級を琵琶湖に浮かべる同クラブの吉本善多選手が、A級ディンギーで優勝を飾っている。

クラブで過ごした良き思い出

日本ヨット協会の誕生を支え、自らも西日本地域で精力的にレース活動を展開した琵琶湖ヨット倶楽部だが、長谷川現会長の話やクラブに残る資料に目を配ると、当時のメンバーは、競技もさることながら家族ぐるみで湖畔のクラブライフを楽しむことに重きを置いていたことがよく分かる。

そんなクラブライフのあり方については、日本ヨット倶楽部が設立されるにあたって発行されたクラブの趣意書にも記されており、一部を要約すれば「社交とス

ポーツを併せた倶楽部の創設が生活の質を高め、社会の近代化につながる」といった内容になる。

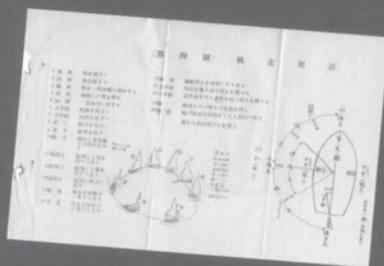
実際、幼いころから父親に手を引かれてクラブに通った、長谷川現会長の脳裏には、メンバーの家族と交流を温めながら、心豊かなヨットライフを送った記憶が鮮明に残されている。

「クラブは競技の普及に力を入れていましたが、だからといってメンバーの子供たちが特に厳しい練習をさせられたことはありませんでした。私の記憶に強く残っているのは、ヨットに乗せられたことよりもメンバー同士が家族ぐるみで浜に出て遊んだ光景です。皆でクラブハウスに泊まって湖の水で米をとき、浜を掘ってシジミを取るなどして食事を作り、近くの漁師がウナギやコイを持ってきてくれることもありました」

幼いころには、メンバーの子供たちが裸になって、湖に流れ入る川でメダカすくいを楽しみ、学校に行く年ごろになると、風がなければヨットに乗らず、浜で野球をして遊んだものだった、と語る長谷川氏。まさに、社交とスポーツを併せ持つ「倶楽部」が生活の質を高めるといふ、趣意書に掲げたクラブライフが実践されていた。

ひと目惚れしたディンギー

今回の話の主人公である吉本善多氏も、A級ディンギーの初代ナショナルチャンピオンの座を獲得するなど競技活動に励



左：1931年に発行された日本ヨット倶楽部の趣意書の表紙。巻頭には、「社交とスポーツを併せた倶楽部の創設が生活の質を高め、社会の近代化につながる」といった内容の文言が記されている
上：日本ヨット倶楽部時代に発行した「ヨット教範」の内容の一部。帆走用語が細かく翻訳され、現在のテキストと同じような図版を使って、分かりやすく解説されている

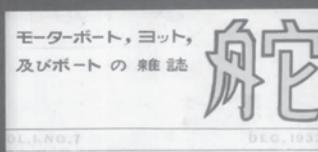
BACK
1939

んでいた一方、琵琶湖ヨット倶楽部の仲間とともに16ft艇に米や缶詰などを積んで琵琶湖周航の旅に出るなど、クルージングにも力を注いでいた。

このときの周航記は、本誌1932年12月号に掲載されており、オーバーナイトを敢行して沖合で夜明けを迎えたときの一節を見ると、「午前四時今迄見えなかった遠くの間山々がまぼつぼ浮かび出て、空と水とが丁度プリズムを通して見た様に美しく輝き出した頃、沖の島は遙か後方に多景島を右舷に見て愛艇は今北小松の沖を走っている。気持ちの良い湖上の朝風が僕等の頬にかかる接吻するとき、ヨットマンのみが享受し得る爽快味に浸る。コッヘルで米を炊き、すがすがしき朝の食事をすまし明神峠をぐるっと廻って大湊へ入港……」と記されており、ロマンあふれるヨットの航行を楽しんでいた様子がうかがえる。

「吉本さんは、A級ディンギーに乗って琵琶湖疏水を下り、いくつかの水門をくり、宇治川、淀川を経て、大阪湾に出て瀬戸内海を航海したことも知られています」

ヨット選手として頭角を現しただけでなく、クルージングにも並々ならぬ情熱を燃やしていた吉本善多氏。できたばかりの日本ヨット協会が1936年のベルリン・オリンピックに参加することを決めると、吉本氏はオリンピックヨレ級の国内選考を戦い抜き、控え選手ではあるものの日本選手団の一員に抜擢されてドイツの地を踏んだ。



吉本善多選手がディンギーで琵琶湖周航に挑んだ、1932年に発行された本誌12月号の表紙。現在のアメリカスカップを連想させる超モダンなマルチハルが描かれている



クラブの敷地で野球を楽しむメンバーの家族。琵琶湖ヨット倶楽部は競技の普及にも力を入れたが、家族ぐるみで楽しむクラブライフも大いに楽しんだ

JOCの記録によれば、残念ながら吉本氏がオリンピック本番のレースで腕を振るうことはなかったようだが、日本のセーラーとして初めて国際レースの舞台に身を置き、いままで知らなかったさまざまな知識を吸収。オリンピックが終わるとドイツ国内を視察して歩き、1940年の東京オリンピックで採用されることが内定していた、EZ級ディンギーをひと目見て惚れ込んだ。

次世代のインターナショナルクラスをめざす激しいコンペを勝ち抜き、次回、東京オリンピックの競技種目にも内定していたこのディンギー。惚れ込んだのは吉本氏だけでなく、ドイツやその周辺各国のセーラーたちから高い評価で受け入れられたが、残念なことに日本を含めて各国に浮かんだ姉妹艇の数々は、その主のセーラーとともに第二次世界大戦という大きな戦禍の渦に巻き込まれていくことになる。(後編につづく)



吉本選手が書いた「琵琶湖周航の記」は当時の本誌に寄稿され、大きな話題になった。米や缶詰などを積み、コクピットのなかで火を起こし、コッヘルを使って炊飯しながらの旅だった



現在もクラブのシンボルとして親しまれているEZ級。メンバーたちは記念のグラスなども作って艇の歴史を伝え続けている

記者の目

2020年のオリンピックが東京で開催されることが、昨年決定した。2016年のリオデジャネイロ大会は、カイトボーディング採用の可否が話題を振りまいたが、その次に控えている東京大会では、どうなっていくのだろうか。いまから74年前に開催される予定だった幻の東京オリンピックでは、吉本善多選手が視察先のドイツで惚れ込んだEZ級が競技種目に内定していたが夢と消え、その影響を受けてEZ級の国際クラス入りも破綻してしまった。「もし、1940年の東京オリンピックが開催されていたら、EZ級は国際クラスとして認められ、その後、大いに普及したはずだから、その意味でも残念だった」と、琵琶湖ヨット倶楽部の現会長、長谷川和之氏は振り返る。時代に翻弄されながらも、21世紀になって日本とオーストリアやドイツなどのセーラーの交流の懸け橋になっていくEZ級の数奇な運命については、次回のお楽しみにしていただきたい。

BACK TO 1939

文=市川和彦 写真=中村剛司(本誌) 写真提供=琵琶湖ヨット倶楽部
text by Kazuhiko Ichikawa photos by Tsuyoshi Nakamura (Kazi) photos by Biwako Yacht Club
 参考文献=「琵琶湖ヨット倶楽部 創立90周年記念誌」、
 「日本ヨット史」(白崎謙太郎 著/発行:舵社)

幻のディンギー、EZ級が琵琶湖に浮かんだ そのときへBACK! (後編)

1922年に創設され、1930年代に入ると活発なレース活動を展開した琵琶湖ヨット倶楽部。日本のヨット界が国際舞台にデビューした1936年のベルリン・オリンピックでは、クラブメンバーの一人、吉本善多(愛称「ぜんた」)氏が初のナショナルチームに選抜されたが、その際、彼はドイツ国内を視察して歩き、1940年の東京オリンピック種目に内定していたEZ級というディンギーに出合って惚れ込んだ。残念ながら、東京オリンピックは幻と化したが、1艇ではあるがEZ級は琵琶湖ヨットクラブが建造。〈SVARA〉と命名されたこの艇は、戦後の混乱期を生き抜いてクラブのフラッグシップとして大切にされ、やがて日本とかの地を結ぶ奇跡的な縁を生み出した。



琵琶湖に浮かんだ、1939年建造のEZ級。戦争の影響を受けてオリンピックへの採用は見送られてしまったが、〈SVARA〉という艇名を与えられて、クラブのシンボルになっていた

1939年の出来事

- 1月15日 横綱双葉山が、安藝ノ海に敗れる。連勝記録69勝。
- 2月14日 日本政府が、日本国民に対し「金製品改修・強制買い上げ」を実施。
- 3月16日 ドイツがボヘミア・モラビアの保護領化を宣言(チェコスロバキア併合)、ハンガリーがカルパト・ウクライナ共和国を併合。
- 4月12日 米穀配給統制令公布。
- 5月13日 NHKが無線によるテレビ実験放送を公開。
- 6月10日 南京総領事館毒酒事件。
- 9月1日 ナチス・ドイツ軍とスロバキア軍によるポーランド侵攻、第二次世界大戦勃発。
- 11月16日 アル・カポネがアルカトラズ刑務所から釈放された。

音楽: ディック・ミネ「上海ブルース」、田端義夫「大利根月夜」、東海林太郎「名月赤城山」
 映画: 「風と共に去りぬ」、「駅馬車」

コンペを勝ち抜いた 10m²クラス

京都市立第一商業学校の漕艇部OB 7人によって1922年(大正11年)に創設された日本ヨット倶楽部。神戸や横浜の外国人ヨットクラブと交流を深めながら、漕艇に励んだ琵琶湖でセーリングの腕を磨き、1930年代から意欲的にディンギーレースの活動を展開。1932年に日本ヨット協会が発足すると、日の丸をあしらったクラブ旗のデザインを同協会に譲り、クラブ名も現在の琵琶湖ヨット倶楽部に改名した。

こうした日本ヨット界の黎明期ともいえる時代の流れのなかで、当時、選手として頭角を現したクラブのメンバーが吉本

善多氏だった。吉本氏は、16ftのディンギーに食料を積んでオーバーナイトで琵琶湖を渡るなど、冒険的なクルージングに思いを寄せる一方、レースでも活躍。1933年に開催された第1回A級ディンギー全日本選手権大会を制し、続く第2回大会にも勝って連覇を達成。ベルリン・オリンピックの選考会では、思わぬミスを重ねて2位に甘んじてしまったものの、優れた戦歴が評価され、控えの選手としてナショナルチームに名を連ねた。

こうして1936年にドイツの地を踏んだ吉本氏。オリンピックが終わった後は、1カ月余り現地に残ってヨットクラブを視察して歩き、1940年の東京オリンピックで採用



1933年に開催された第1回A級ディンギー全日本選手権大会、ならびに翌年の第2回大会を制覇し、1936年のベルリン・オリンピックにも参加した吉本善多氏(右)。左は、日本ヨット倶楽部の創設メンバーの一人で、善多氏の伯父にあたる吉本正雄氏。ともに戦争で命を落としてしまったが、彼らが愛した(SVARA)は、今日もクラブのシンボルとして輝き続けている

が内定していたEZ級というディンギーを見て、ひと目惚れした。

EZはEinheits Zehnerの略で、10m²級(Zehner)で最も性能が良い設計に統一化(Einheits)された、という意味を持つ。

ドイツでは19世紀後半から、湖でレースを楽しむレイクボートが盛んに建造されるようになり、オーストリアやスイスなどの周辺各国とともにセールエリアを基準にしたクラス分けが行われていくようになった。

そして、1920年代に入るとセールエリア22m²のJクラス、20m²のZクラス、15m²のMクラス、10m²のIVクラス(Nクラスとも呼ばれた)などで、誰が設計した艇が最も優れているかを競う建造競争が激しくなり、特に10m²のIVクラスは、いろいろな設計の艇が各地で独自のフリート活動を展開。そのため、ワンデザイン化してレースを一つにまとめようという声が上がった。

そこで、1932年にさまざまな検証が実施され、その結果、ベルリンのReinhard Drewits氏が設計した艇が最高の評価を獲得し、Einheits Zehnerの名を与えられてEZ級が誕生した。

戦争に翻弄された名艇

1932年に公認されて以来、EZ級はドイツをはじめ、オーストリアやスイス、ハンガリーといった周辺各国に広く普及し、1940



まだ日本ヨット倶楽部だった、1930年(昭和5年)当時の艇庫。台風で大破してしまったセーリングクルーザー(ユングフラウ)も、この時点では「NIPPON YACHT CLUB」と記された右奥のオーニングで格納されていた

年の東京オリンピックでは競技種目に採用される予定となった。吉本氏がドイツ国内を視察して歩いた1936年は、まさにEZ級が高い評価を得て普及の一途をたどっていた絶頂期だったといえるだろう。

EZ級は、低いフリーボードと細いビーム、長い水線長のシャープなハルを持ち、メインセールにはフルバテンを装着。また、当時はA級ディンギーに象徴されるようにガブリグが主流であり、EZ級にもガブリグが採用されたが、高いアスペクト比のメインセールによって、ガブリグでありながらスループと錯覚してしまうようなフォルムが形成されている。そんな同艇のハルやセールの特徴は、いかにも戦局的であり、A級ディンギーの時代に生まれたことを考えれば、時代の先を行くモダンなデザインになっていた。

もともと、こうした特徴の数々には、大きな波が立ちにくく、強い風もさほど吹かな

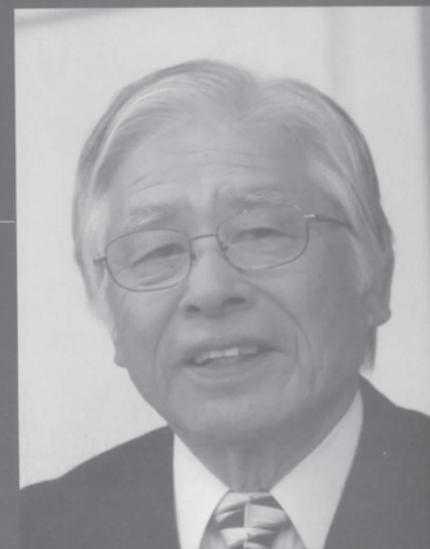
長谷川和之(はせがわ・かずゆき)

1930年、京都府生まれ。琵琶湖ヨット倶楽部の前身、京一高漕艇部の創設メンバーの一人。長谷川英一氏の子息として戦前のクラブライフを経験。自身も、戦中から現在に至るまで漕艇やヨットに乗り続け、1998年には、日本最古のディンギーといわれているクラブ艇、テラーボートのレストアを敢行。長年にわたってクラブ会長も務め続けている。



戦後に活動を復活させた琵琶湖ヨット倶楽部。右から2番目が現会長、長谷川和之氏。クラブハウスのベランダから、ヨットが湖面に浮かぶ美しい景色が広がっている

終戦の玉音放送をヨットの上で聴いたという、琵琶湖ヨット倶楽部 現会長の長谷川和之氏。長いクラブの歴史を知る貴重な証人である



「私たちが残した最後のDNAが
故郷で蘇ったことは、うれしい限りです」



ビワコ・カインドレガッタ第3回大会(1975年)のゲートスタートで、パスファインダーを務める(SVARA)の雄姿。EZ 1のセールナンバーが誇らしい



琵琶湖ヨット倶楽部の広報を担当している青木英明氏。アルトゥア・ブラサティ氏との交流によって、EZ級の存在意義を再確認することができた

い湖特有のゲレンデ環境が意識されていた。いまでも、ドイツやスイスのなどの湖では、大きなセールエリアと細長いハルのスピードボートが盛んに作られており、同じヨーロッパでも北海やバルト海、そして地中海とも異なる、独特のヨット思想が継承され続けている。まさにEZ級は、そんなレイクボートの歴史の序章を飾る存在だったといえるだろう。

ただし、1940年の東京オリンピックは内海の横浜沖が会場になっていたので、さほど心配はなかったのかもしれないが、もし1964年の東京オリンピックのときのように、外洋の波や風が入る江の島沖で開催されることになっていたら、EZ級の採用は難しかったのではないと思う。横浜がオリンピックの会場になっていたこと

も、EZ級が日本に来る一助になっていた。

そんなレイクボートに魅せられた吉本氏がクラブに帰ってドイツの見聞を報告すると、興味を抱いたクラブのメンバー、鈴木英氏がドイツに設計図を発注。地元の桑野造船に建造を依頼して、結果的に唯一となる国産EZ級が1939年に進水した。

この艇のハルは、ヒノキのシングルプランキングで建造され、トランサムだけ厚手のケヤキを採用。金属繊維装は、吉本氏が勤めていた島津製作所が担当した。

しかし、こうした過程のなかで大きな事件が起きていた。肝心の東京オリンピックが戦争によって中止となり、その影響がEZ級の生まれ故郷のドイツにも波及。東京オリンピックの採用に合わせて進めら

「図面を探して私たちにたどり着いた
ブラサティ氏への努力には、頭が下がりました」

BACK
1939

EZ級データ

- 全長：6.6m ●全幅：1.4m
- セーリング面積：10m²

1996年に、クラブが拠点を構える滋賀県ヨットハーバーの艇庫が改装された際、竣工式で記念に展示された〈SVARA〉。この4年前に吉本哲男氏がレストアを行っていたため、美しい姿を見せている



戦後もないころのクラブ棧橋の様子。戦前からクラブ艇として愛用され、戦後も進駐軍への供出を免れたテリーボートが筋(もや)われている

れていた、同級のインターナショナルクラス入りが白紙に戻されたのである。

EZ級と出合ったときは、まさかこのような展開になるとは夢にも思わなかったに違いない吉本氏だが、琵琶湖に浮かんだ国産唯一のEZ級は〈SVARA〉と命名されてクラブメンバーに親しまれ、いつしか、その戦局的で美しい姿はクラブのシンボルになっていった。

ところが、戦争によってクラブメンバーが次々と出征してクラブの活動が停滞。吉本氏も陸軍に入隊して硫黄島に赴き、激戦の最中で亡き人になった。

琵琶湖ヨット倶楽部の創設メンバーの一人、長谷川英一氏の子息で、戦中、中学生だった現クラブ会長の長谷川和之氏はこう振り返る。

「幼いころから父に連れられて漕艇やディンギーに乗せられましたが、戦争が続くなかでクラブメンバーが次々となくなり、気が付けば、ディンギーを出して乗るのは



EZ級のリビルドを行う造船所を見学したときの様子。右から、造船所のオーナー、そしてブラサティ氏と青木英明氏夫妻。多くの艇が再生され、現在は選手権大会も開催されるようになってきたという

中学生の私ぐらいになっていました。忘れませんが、8月15日の玉音放送はテリーボート(K.R.A.C.神戸外国人ヨットクラブから譲り受けたスループ・ディンギー)に1人で乗りながら鉱石ラジオで聴きました」

オリンピックの夢が消え、主人も戦争でなくしてしまった国産唯一のEZ級〈SVARA〉。しかも、戦争が終わって進駐してきた米軍によって、思わぬ危機が迫っていた。

時代を乗り越えた出会い

戦後、進駐軍がクラブに乗り込んできたときのことも、長谷川氏はよく覚えている。

「彼らはA級ディンギーをはじめとするクラブ艇を見て歩き、将校の娯楽用に供出してほしいと言って、ほとんどすべての艇を持って行ってしまいましたが、幸いにもテリーボートと〈SVARA〉だけは置いていきました。2艇とも機装が複雑で乗りにくいと思ったようでした」

供出した艇は数年後に戻ってきたが、どれもひどく傷んでいたため、やむなく廃棄した艇もあったという。もし、〈SVARA〉も持っていかれていたら同じ運命をたどったかもしれないので、ここで助かったのは奇跡に近い、と長谷川氏は言う。

そんななかでも日本のヨット界は着々と復興していき、終戦の翌年、昭和21年には第1回国民体育大会が京都府で開催された。ヨット競技が琵琶湖で実施され、琵琶湖ヨット倶楽部が運営に協力した。



ウィーンでメンテナンスされているブラサティ氏のEZ級。2013年の春、ブラサティ氏の計らいによって青木夫妻が現地に招かれて見学することができた



オーストリアで新調したニューセーラーを試す(SVARA)。現在、ドイツやオーストリアでは、EZ級とは言わずNクラスと呼ばれており、そのJPN 1ということになる

その後、クラブでは徐々に艇を増やして活動を活発化していき、(SVARA)も現役で活躍。1975年から始まったピワコ・カインド・レガッタでは、ゲートスタートのパスファインダー(スタートラインを横切ってスタートを知らせる艇)を(SVARA)が担って親しまれ続けたが、老朽化が進んだことから、1992年に吉本善多氏のいとこにあたる吉本哲男氏がレストアを敢行。再進水式が行われ、あらためて同艇がクラブのシンボルとして大切にされていくことになった。

こうして戦前、戦後にわたって現役を続けた(SVARA)であるが、21世紀になって2009年に思わぬ知らせがオーストリアから舞い込んだ。

「ウィーンのアルトゥア・ブラサティという人から、『琵琶湖ヨット倶楽部のホームページにEZ級の写真やスペックが載っているが、なぜこの戦前の艇が日本にあるのか教えてほしい』とのメールが送られてきたので、返信で事の経緯を説明してあげました」と、クラブ広報担当の青木英明氏は振り返る。

実は、ドイツやオーストリアでは戦争で多くの艇が犠牲になったが、ブラサティ氏など当時の美しい艇に魅せられた愛好家によってレストアされ、アーカイブワークをするとともにクラス協会を復活していったが、設計図面の存在までは確認できていなかったという。EZなどのキーワードで検索を続け、琵琶湖ヨット倶楽部のホームページに載っていた(SVARA)を探し当てたというのだから、その執念には驚かされる。

「私たちは設計図もしっかり保存してい

たため、コピーを送ってあげたら大感激され、2カ月後にはブラサティさんが来日してクラブを表敬訪問してくださいました」

このときの様子は地元の新聞にも取り上げられ、「日本にこの船があるのはミラクルだ」とブラサティ氏が興奮気味に語ったことが記されている。

時代を超えて、生まれ故郷の愛好家を日本に手繰り寄せた(SVARA)。これでもてたしと思った青木氏だったが、ブラサティ氏の幹事計らいがお返しに用意されていた。

脈々と受け継がれるDNA

青木氏がブラサティ氏に送った図面のコピーは、愛好家を喜ばせただけでなく、ドイツのボートショーにも展示されて反響を呼んだ。また、オーストリアの王宮ヨット



クラブの仲間と(SVARA)のニューセーラーをセットする青木氏。スリムな木造ハルが美しい

協会が主催し、ブラサティ氏が所属するユニオンヨットクラブが運営する「国際オーストリア・クラシック・セールウイーク2010」というヨットレースに同型のEZを貸すので、一緒にレースをしようという招待を受けた。

その名のとおり、このレースは主に戦前の艇を中心にしたクラシックボートだけが参加するもので、オーストリアの王宮ヨットフリートが主催する由緒ある大会として知られている。2010年から琵琶湖ヨット倶楽部にも招待状が届くようになり、最初に招待を受けたこの年は、長谷川氏や青木氏など4人が現地でEZ級を借りて出場した。

「オーストリアやドイツ、スイスといった周辺国から42艇のクラシックボートが会場の湖に集結した景色は実に壮観で、開会式には、かつてこの地を治めたハプスブルク家の末裔が挨拶に立って祝砲が鳴り響きました。ですから、まるで戦前の



奇跡の交流を生んだライズを手にする長谷川会長(左)と青木氏。ブラサティ氏がクラブのホームページを見つけれなかったら、今回のストーリーは生まれなかった

BACK TO 1939

欧州貴族が集うヨットレース会場にタイムスリップしたかのような錯覚を覚えました。言い換えれば、そこまでして彼らはオールヨットを大切にしながら、古き良き伝統を守り続けているのです」(長谷川氏)

ちなみに、このとき出場したEZ級は日本勢が借りたものを加えて、わずかに2艇。クラシックボートのなかでも、いかにEZ級が貴重な存在だったのかがうかがえる。現在は、15艇ほどがレストアされて、毎年、選手権大会が開催されるようになったそうである。

「私たちが残した設計図という最後のDNAが、EZ級の故郷で蘇ったことはうれしい限りです。また、私たちがクラシックレースに招かれたことで、古き良き伝統は受け継いでいかねばならないことを切に感じました」(長谷川氏)

琵琶湖の埋め立て事業があって、1962年に琵琶湖ヨット倶楽部の艇庫は現在の滋賀県ヨットハーバー内に移転した。ここは公共施設なので艇庫と共有のスロープがあるだけで、かつてのクラブハウスのようにテラスや芝生の敷地を設けることはできないが、艇庫内にウッドデッキや書棚を置くなどしてクラブハウスの雰囲気を作っている。こうした努力を重ねていかないと、戦前から続いてきたクラブライフの楽しさが息切れしてしまうからだ、と長谷川氏は言う。「私が子供のころ、風がない日はクラブハウスの庭で野球を楽しんだものでしたが、そ



現在の艇庫脇に掲げられているクラブボード。「SINCE 1922」が歴史の重みを伝えている

こまでいかななくても、クラブのメンバーが心を通わせる場が欲しいのです」

ヨットを出して、帰ってきたら艇庫にしまっていて終わりでは、クラブライフの楽しさは薄れていく。かの地のような伝統を築いていくには、ヨットを通じた心の触れ合いを大切にすることがある、と長谷川氏は語っていた。

記者の目

今回の話には、たかさんの「if」が存在する。もし、吉本善多氏がドイツを視察しないで帰国していたら、そもそもこの話は生まれなかったはずだし、1940年に東京オリンピックが開催されていたら、EZ級はまったく違った道を歩んだに違いない。

また、吉本氏が戦死していなければ、彼も戦後のヨット界をけん引してくれただろうし、進駐軍がEZ級を接収していたら、今日、〈SVARA〉の姿を見ることはなかったかもしれない。

そして何より、設計図を探し当てたブラサティ氏の執念も半端ではない。インターネットの時代だからこそ起こり得た奇跡だったと言えるだろう。この出会いがなければ、現在、15艇ほどが再建造されたという、故郷でのEZ級の復興はあり得なかったのである。

船には船の命があると人は言う。〈SVARA〉は己の命を必死で守りながら70年の時を生き抜いて、すばらしい人と人との出会いをプレゼントしてくれたのだった。



国際オーストリア・クラシック・セールウィークへの招待状は毎年届くようになり、参加しなかったときは、写真のようにポスターに寄せ書きを添えて送ってくる。遠く離れていても彼らは友情を忘れない

地域プラス

お部屋探しは学生マンションのUniLife!
UniLife 京都駅前店
0120-952-924

取材テーマを募集
京都新聞社は、双方同報報道推進協議会の一環として、取材テーマを募集しています。取材テーマは、お住まいの地域や、お仕事の分野、おもしろい出来事など、何でも構いません。取材テーマは、お住まいの地域や、お仕事の分野、おもしろい出来事など、何でも構いません。

戦火に散った伝説のヨットマン
戦前の時代に作られたヨットは、戦時体制の中で、戦艦や駆逐艦の部品として使われた。戦後、ヨットは再びレジャーとして人気を博した。ヨットマンの伝説は、戦火に散った。ヨットマンの伝説は、戦火に散った。

戦火に散った伝説のヨットマン

吉本善多は、戦前のヨットマンとして知られる。戦火に散った伝説のヨットマン。吉本善多は、戦前のヨットマンとして知られる。戦火に散った伝説のヨットマン。吉本善多は、戦前のヨットマンとして知られる。戦火に散った伝説のヨットマン。

新艇「SVARA」造船

1940年幻の東京五輪目指し
新艇「SVARA」造船
設計図が縁 欧州の愛好者と交流も



設計図が縁 欧州の愛好者と交流も
ヨットマンの伝説は、戦火に散った。ヨットマンの伝説は、戦火に散った。ヨットマンの伝説は、戦火に散った。

29歳の若さビルマで戦死

吉本善多の兵籍のコピー。ビルマ(現在のミャンマー)で戦死したことが記されている。吉本善多は、29歳の若さでビルマで戦死した。

吉本善多は、戦前のヨットマンとして知られる。戦火に散った伝説のヨットマン。吉本善多は、戦前のヨットマンとして知られる。戦火に散った伝説のヨットマン。

吉本善多のように戦前の五輪に参加し、戦争で命を落とした人は「戦没オリンピック」と呼ばれる。日本の戦没オリンピックを調査している広島市立大の曾根幹子名誉教授(66)によると、戦病死や空襲で死亡した死者を含め38人のぼる。

「友情のメダル」大江も

38人の戦没オリンピック
「友情のメダル」大江も
月、フィリピン・ルソン島で27年の生涯を終えた。走り高跳びの選手として76年のモントリオール五輪に出場した曾根名誉教授は、関係者からの聞き取りで、大江が出征中にパイプのようなものにぶら下がって懸垂していた影を知った。「いつか平和な時代が来れば、競技ができることに一筋の希望を抱いていたはず」と思いを返らせる。

5輪は平和の祭典であるが、私たちがその意味をかみしめる機会は少ない。曾根名誉教授は「原爆を考える時もあるが、いかに当事者性を持ち、想像力を働かせられるか。オリンピックを通して知ることでリアルに浮かび上がる」と語る。

京都新聞 2023年1月4日

(第3種郵便物認可)

聖地化の夢こぎ出す

白い帆のヨットが青い湖上を疾走している。季節を問わず、琵琶湖で目にするおなじみの風景だ。

「風を受けて爽快に進む。自然に身を置いて、夢中になれます」

日焼けした顔をほころばせてヨットの魅力を語るのは、京都市の会社社長、青木英明さん(64)。日本人が作った国内最古のヨットクラブと言われ、昨年創立100年を迎えた「琵琶湖ヨット倶楽部(BYC)」の会長を務める。

BYCは、大津市の梶原柳が崎ヨットハーバーを拠点とし、戦前のベルリン五輪では代表選手を送り出した名門だ。現在は社会人約40人が月1回のレースで風を満喫する。

会員の大阪市の自営業上野美子さん(63)は京都工芸繊維大で「初の女性ヨット部員」の経歴を持つ。以前は大阪湾に面する兵庫県のヨットハーバーを利用していたが「海水はヨットの維持が大変で、淡水に移りました」と琵琶湖の良さを明かした。

BYCなどが子ども向けに設立した「琵琶湖ジュニアヨットクラブ」の指導員、城務さん(57)は、親子3代でヨットライフを楽しんでいる。このクラブで、ヨットマンだった父親の草さん(故人)



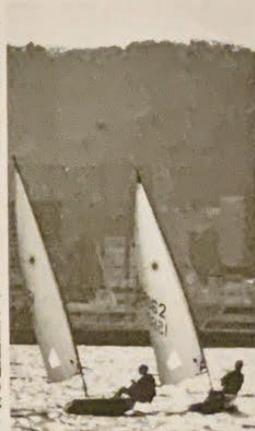
3 湖上スポーツ



カヌースクールで選手への指導にあたる江口さん(左端、いずれも大津市で)

に幼い頃から操船法を学び、現在はその技術を2人の息子に伝える。高校3年の長男毅さん(18)も高校2年の次男輝さん(16)も「練習に打ち込めるのは父のおかげ」と声をそろえる。2人ともインターハイやイン

琵琶湖の南端に位置する関カレで全国制覇の夢を追う。務さんは「3代でヨットに親しんでこられたのは、琵琶湖があるからこそ」と感謝の思いを口にした。



琵琶湖を疾走するBYCのヨット

シガリズムの一例に

memo 県内では琵琶湖や流域の河川でヨット、カヌー、SUP、ウェイクボードなどを楽しめる事業所が30か所以上ある。県は「琵琶湖をはじめとした自然と歩みをそろえ、遊覧の時間の流れや暮らしを体験し、心のリズムを整える新たなツーリズム」として「シガリズム」を掲げ、その観光振興構想の中で「生きる力」と「感性を育む」教育旅行の一例に湖上スポーツ体験をおげている。

ボートをこぎトレーニング機器で練習する人々を指導する小原さん(右端)



西みらいローイングセンター(県立琵琶湖漕艇場)は「ボートの聖地」として知られる。一昨年の東京五輪で金メダルに輝いたニュージールランドチームも付近で合宿した。同志社大ボート部OBで大津市の小原隆史さん(54)は、自身の子を通じ、障害のある子どもがスポーツを楽しめる場がないことに気付き、2014年、NPO法人「琵琶湖ローイングCLUB」を設立。同センターで身体、知的障害のある人たちのボート「パラローイング」の指導にあたる。「オールだけで動かせるボートなら、障害の有無にかかわらず、同じ土儀で楽しめ

わらず、同じ土儀で楽しめず」。今春には瀬田の唐橋近くの施設を改装し、湖上スポーツの拠点としてカフェを併設し、ボートやSUP(スタンドアップパドルボード)を体験できる場もつくる予定だ。小原さんの夢は膨らむ。「年齢、障害、立場を超えて交流できる『湖上スポーツの聖地』にしたい」

年間4万人……。交通の便が決して良いとはいえない県西部の大津市雄琴で「オーパルオプテックス」が運営する自然体験学習施設には、単純計算で1日100人以上の観光客や修学旅行生らが訪れ、カヌー体験などを楽しむ。05年からは、5歳以上を対象にしたカヌースクールを開き、国際的な大会にも日本代表を送り出している。

ただし、スクールが選手たちには求めるのは「強さ」だけではない。例えば、週末の練習後には必ず湖岸で「ごみ拾い」をする。スクールで監督を務める江口貴彦さん(41)は「日本一大きい琵琶湖での練習を通じて、環境のこともしっかり学べる人材に育ってくれたら」と願う。カヌーのそばを魚が悠々と泳ぎ、時にはベットボトルやごみ袋といった漂流物が目に入る。そんな琵琶湖の現状は、環境問題に関心を高め、行動する人材を育てるのにつけてつけの場所のようだ。(林華代)

アルプスの湖上



船齢70年以上のヨットが集結する オーストリア、アッター湖のクラシックレガッタ

ザルツブルクの東、アッター湖の湖畔にある「ユニオン・ヨットクラブ・アッターゼー」。
ここで毎年開催される1950年以前に建造されたヨットによるクラシックレガッタに、
「琵琶湖ヨット倶楽部」の有志が参加した。美しい山々に囲まれた湖の上を
滑るように走るクラシックヨットの姿は、まさに芸術品だ。

写真・文=青木英明(琵琶湖ヨット倶楽部会長)
photos & text by Hideaki Aoki (Chairman of Biwako Yacht Club)

を帆走る

ATTERSEE WEEK
AUSTRIAN CLASSIC 2019





戦闘的で美しい木造レーシングボート

ハンザヨレ級。西村・小松原組でヤードスティックレースに



Attersee 
AUSTRIAN CLASSIC woche
2019 founded 1887

アルプスの湖上を帆走る
ATTERSEE WEEK AUSTRIAN CLASSIC 2019



琵琶湖で活躍中の〈EZ〉

2008年、〈EZ〉をきっかけに、このクラスをドイツとオーストリアで復活させるべくアーカイブワークをしている Artur Vlasaty 氏と懇意になり、このクラシックレースの存在を知ることになり、主催クラブから招へいを受けたというわけだ。2010年にも一度参加しており、今回は2度目となる。

琵琶湖で現存する
木造艇〈EZ〉が参加のきっかけ

7月30日～8月4日の間、オーストリアのアッター湖で開催された「ATTERSEE WEEK AUSTRIAN CLASSIC 2019」に、琵琶湖ヨット倶楽部(BYC)のメンバー有志5人で参加した。このレースは1950年以前に建造されたオールドボートが参加できるもので、全艇がウッドンボート、マストも半数はウッドだ。各艇はそれぞれ昔の構造のまま見事にレストアされており、ニスと光沢で今でもきれいに光っている。

実はBYCも戦前のオールウッドのヨットを動態保存していて、それがこのレースへの参加につながった。そのいきさつ

から説明しよう。

1936年のベルリンオリンピックに我がBYC部員(同志社YCの創設メンバーでもある)故・吉本善多が出演し、その際に次回1940年に開催予定だった東京オリンピックへの参加を目指して、レース艇の図面を持ち帰り、日本でその艇を建造した。これが〈EZ〉と称するEINHEITSZEHNER(アインハイッツツェナー)で、BYCでは、このオールドボートを年一度のクラブ主管レースで帆走させている。〈EZ〉は今年で船齢80年、現役で水上を帆走するヨットとしては日本最古の艇といわれている。

タイムマシンで過去に
戻ったかのようなレースシーン

レースは前半がクラス別、後半はヤードスティックを用いてのハンディキャップレース。われわれは、クラス別ではオリンピック級、ヤードスティックレースではハンザヨレ級という艇を借りてレースに参加した。

風は概して弱くノーレースの日もあったが、湖水でのクラシックヨットレースを存分に楽しむことができた。成績は振るわなかったが、同じ趣味を持つ仲間として、地元のセーラーたちは遠方からの参加者を温かくもてなしてくれた。表彰式での熱烈な歓迎ぶりは忘れられないもので、ヨットイングという一生涯の楽しみの世界共通言語を堪能するひとときだった。

このレースで注目すべきはソルダー級という40フィートのキールボート。細くて長い、しかもフリーボードが低い美艇で、

右: 古老の夫婦でゆったりとセーリング(〈EZ〉と同型艇)
右下: 女性だけのチームも……



巨大なセールを展開する。約100年前の構造をそのままにレストアされており、ニスで仕上げた、それは美しいボートで、まさに“貴婦人”だ。湖面をこの艇を含むウッドボートで埋め尽くすレースの様子は、まるでタイムマシンで過去に戻ったかのような素晴らしい光景だ。

ヤードスティックレースの光景





上：湖面に山肌が映る中、静かなセーリングを堪能する
下：アルプスの風景にお似合いの木造ボート



美しい背景と見事に溶け合うソルター級のセーリ

絵画の中でセーリング そんな気分を満喫

アッター湖はオーストリア西部、アルプス山麓に点在する氷河湖の一つで、オーストリア最大の湖である。ホストのユニオン・ヨットクラブ・アッターゼー(UYCAS)は、会員数1,000人のヨットクラブで、オーストリア最大のヨットレース基地。湖畔のクラブハウスに面して多くのポンツーンが設置され、大荒れすることのない湖だから、水と建物が近いとても魅力的なヨットクラブだ。

セーリングは湖水散策のような気分で、静かにゆったりとヨットイングライフを楽しむことができ、心が満たされる。画家のクリムトが好んで住み、多くの

風景面を残した地、そんな絵画の世界に入り込んだような、時を忘れる優雅なセーリングシーンがここにあった。

琵琶湖ヨット倶楽部は1922年創設、3年後には100周年を迎える。昭和初期にIYRUの国際ヨット競技規則を導入して日本ヨット競技の普及に尽力してきた。現在は月一度のクラブレースを楽しむ程度だが、先人の導きのおかげで、このようにヨットをライフワークとして楽しむコミュニティに接することができた。まさに海(湖)のおかげです。人生の宝物を得た感慨でいっぱいのリアルな夢を見に出かけた、そんな気分の旅だった。

ヨットクラブ玄関





アルプスの湖上を帆走る
ATTERSEE WEEK AUSTRIAN CLASSIC 2019

湖畔のヨットクラブ、UYCAS

レース後のなごやかな表彰式

遠征に参加した面々。左端が筆者。
BYCの長谷川和之名誉会長(右から2人目)も同行



湖上で育まれた 1世紀の記憶

創立100年を迎えた琵琶湖ヨット倶楽部の歴史

日本のヨット発祥の地の一つとされる琵琶湖。
その湖でセーリング文化を継承してきた琵琶湖ヨット倶楽部が
今年で100周年を迎えた。

7人の有志が前身となるクラブを設立したのは、1922年(大正11年)で、
当時は日本ヨット協会も発足していない時代だった。

伝統あるクラブの歴史を振り返りながら、
コロナ禍で3年ぶりの開催となる同倶楽部主催ディンギーレースである
「第22回SAILおおつ2022」の活況をお伝えする。

文=友田享助(本誌) 写真=友田享助(本誌)、琵琶湖ヨット倶楽部
text by Kyosuke Tomoda (Kazi) / photos by Kyosuke Tomoda (Kazi), BIWAKO YACHT CLUB

琵琶湖で開催されたSAILおおつ2022で帆
走するEZ級ディンギー(SVARA(スワラ))。
スキッパーの長谷川 健さん(後部)とクルーの
香織さん夫妻が往年の木造船の姿を輝かせた



上：1932年の日本ヨット協会の発足後
は、それまでのクラブ旗のデザインを同協
会に譲り、琵琶湖ヨット倶楽部では、十字
を斜めにするXのラインにした

左：琵琶湖ヨット倶楽部の現在のクラブ
旗が描かれたプレート。旗のデザインは
変更して以来、今も受け継がれている



日本ヨット発祥の有力地

日本人による日本初のヨットクラブは諸説ある中で、琵琶湖は有力の地とされている。琵琶湖では明治40年頃に地元の人がヨットを走らせたという話が残っている。その後、現在の琵琶湖ヨット倶楽部の前身となる日本ヨット倶楽部が1922年（大正11年）に創設された。この事実と名前から考えれば、日本初のヨットクラブの一つとみてもいいだろう。

創設メンバーは、京都市立第一商業学校ボート部OBの7人。漕艇を楽しみながら、セーリングにも興味を抱いたようだ。そのメンバーの1人である長谷川英一さんの子息の長谷川和之さん（91歳）は現在、琵琶湖ヨット倶楽部の名誉会長を務めている。長谷川さんの話によると、父の英一さんは、進学した慶應義塾大学（東京都）で漕艇を続けた後、地元に戻ってヨットクラブの立ち上げに参画した。クラブのメンバーたちは、横浜や神戸などで



ドイツから取り寄せた設計図に基づいて、1939年に桑野造船所で建造されたEZ級の木造船ディンギー。（SVARA（スワラ）と名付けられた

ヨットを愛好する人たちから、ヨットに関する情報を得ていたという。

創設メンバーの7人は、ディンギーでのヨットの操船を覚えると共に、1924年（大正13年）には地元の造船所で30ftのセーリングクルーザー〈ユングフラウ〉を建造した。翌年7月には琵琶湖を周遊したものの、8月の台風で大破してしまったことが惜まれる。

シンボルのEZ級ディンギー

昭和の時代に入ると、イギリスから取り寄せたヨットのルールブックを翻訳してディンギーレースを盛り上げていく。1932年



琵琶湖ヨット倶楽部に現存するEZ級ディンギー（SVARA（スワラ））の設計図。額に入れて飾られている

（昭和7年）に日本ヨット協会が発足すると、10年にわたって親しんできたクラブの名称を譲り、琵琶湖ヨット倶楽部に名称変更した。併せて、クラブ旗のデザインも譲り、日本全国にヨットを広めたいという志



琵琶湖ヨット倶楽部
名誉会長
長谷川和之さん

「100年を迎えるとは思って
もいなかったで、とてもうれ
しいです。創立90周年の際
には祝賀会ができましたが、
今回は新型コロナウイルス
のためにお預けです。それ
でも、こうして100周年の記
念レースだけでも開催でき
たことに心から感謝していま
す。これからも多くの人に琵
琶湖でセーリングを楽しんで
もらいたいです」（長谷川）

琵琶湖ヨット倶楽部の創設メンバーの1人の
長谷川英一さん（左）と現名誉会長で幼少期
の和之さんの1933年の親子写真



100th Anniversary of BIWAKO YACHT CLUB

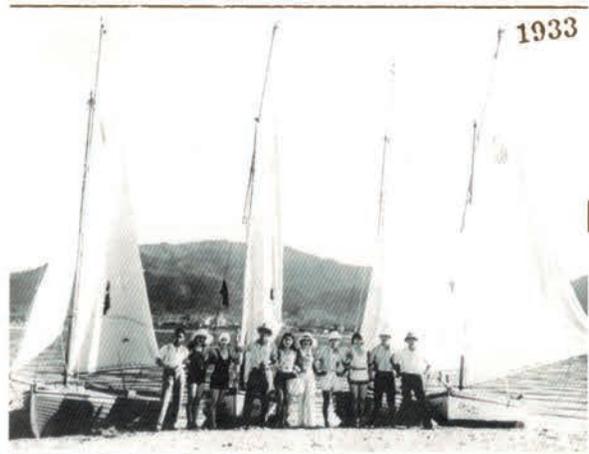
琵琶湖ヨット倶楽部 今昔物語

琵琶湖ヨット倶楽部には、多くの写真が残されている。設立間もない当時と今の発展を写真で比較してみたい。



1933

1933年、クラブハウス前の広場で野球を楽しむ子どもたち。沖には浮かんでいるヨットが見える



1933

1933年、太湖汽船（現：琵琶湖汽船）の宣伝に協力して日活女優を迎え、さまざまな撮影が行われた

から、同志社大学や京都帝国大学のヨット部の設立に尽力したほか、九州帝国大学のヨット部と交流しながらヨットの普及を図った。

長谷川さんは「強く残っている幼い頃の記憶はヨットに乗せられたことよりも、メンバーが家族ぐるみで浜で遊んだことです」と振り返る。メンバーの子どもたちが裸になって、湖に注ぎ入る川でメダカを取ったり、浜辺で野球をして楽しんだという。社交と

スポーツを謳歌するクラブライフがメンバーの心意気に浸透していたようだ。まさに日本ヨット協会が設立され、舵誌が誕生した1930年代は、戦前の日本のヨット文化の隆盛期だったことがうかがえる。

琵琶湖ヨット倶楽部では戦前、メンバーがオリンピックに参加している。1936年（昭和11年）のベルリン大会に、倶楽部のメンバーだった吉本善多選手がヨレ級のレース選手に選出された。その際、

吉本選手は細長い船体形状のインハイツェナー（EZ）級のデインギーに魅了されて帰国した。その後、ほかのメンバーがドイツから図面を取り寄せ、EZ級デインギーを地元の造船所で建造。その木造艇は（SVARA（スワラ））と名付けられた。それ以降、クラブ艇の中心的存在として活躍し続け、1992年の大改修を経て、現在も琵琶湖ヨット倶楽部のシンボリックな存在になっている。



1935

1934年に台風で船庫が崩壊し、翌年に立派な船庫に建て替えられた。右側がテラス付きのクラブハウスになっている



1935

1935年ごろのクラブハウス前では、複数の家族がテラスや庭で思い思いの時間を楽しんでいる



琵琶湖ヨット倶楽部 会長 青木英明さん

「自分が琵琶湖ヨット倶楽部に関係するずっと以前から倶楽部があったので、こうして100周年の重さと、100周年を迎える際に会長でいることのありがたさを感じます。そして、これからも倶楽部が続いていくように一層心が引き締まる思いです。伝統があるからと門戸を閉ざすことなく、誰もが気軽に参加できる倶楽部にしていきたい」（青木）



2022

現在のクラブハウスは、柳が崎ヨットハーバーの中（建物の右下）にある。上層階は駐車場になっている

湖上で育まれた1世紀の記憶

100th Anniversary of BIWAKO YACHT CLUB



SAILおつ2022のレース開始前の記念写真。琵琶湖ヨット倶楽部のほか、京都ヨットクラブ、湖翔ヨット倶楽部のメンバーもレースを盛り上げた

盛大にレースを開催

琵琶湖ヨット倶楽部では滋賀県大津市の柳が崎ヨットハーバー沖の琵琶湖で8月28日、同倶楽部主催のディンギーレースの「SAILおつ2022」を開催した。コロナ禍のため3年ぶりの開催となったが、琵琶湖ヨット倶楽部100周年記念レースに47艇ものディンギーが参加し、同倶楽部と関係が深い京都ヨットクラブ、湖翔ヨット倶楽部が共催する盛大なレースとなった。

レースでは、1939年(昭和14年)に進水したEZ級ディンギーで、ダブルハンドの木造艇「SVARA」も参戦。470級やスナイブ級のほか、レーザー/ILCA級やシーホッパー級などのディンギーと一緒に往年の雄姿を披露して琵琶湖を帆走した。

一般の部は、レーザーラジアル/ILCA



SAILおつ2022の一般の部にスナイブ級で出場し、3位に輝いた松下隆一さん(右)と野々口康介さん。昔も今も琵琶湖の浜には笑顔があふれる

6級の京都府の多賀康太郎さん(47歳)、オブティミスト級は滋賀県の須田博也さん(14歳)が、それぞれ優勝に輝いた。

レースを共催した湖翔ヨット倶楽部会長の柏原利陸さんは「こうして琵琶湖のヨット文化が継続されているのは琵琶湖ヨット倶楽部の伝統が大きいと思います。これからもメンバー同士が協力し合ってセーリングを盛り上げていけたらうれしいです」と笑顔で話した。

多くのセーリングファンに愛されている琵琶湖ヨット倶楽部。日本有数の伝統あるクラブの次の節目となる創立110年も、たくさんの人が楽しみにしている。



1933年に柳が崎沖で開催された第1回西部日本ヨット選手権大会。琵琶湖でのレースの歴史は長い間、育まれている



SAILおつ2022で競い合うディンギー。セールナンバー 204411のレーザーラジアル/ILCA 6級の(多賀康太郎さん)が優勝した